

はーとふるるメッセージ

2001

第5回

特選作品紹介

(学年は、いずれも応募時のものです。)

作文・中学生の部



ふのかわ あやか さん
(東中学校2年)

心と心のふれあいについて

夏休みに、私は、母の勤務先の夏祭りに出かけました。母は京都の福祉施設で、障がい者のリハビリを行う仕事をしていました。障がい者の人たちの集まった夏祭りには、多くのボランティアたちが、食事や移動の介助をテキパキと行っていました。五十人程度の障がい者に対し、百人以上のボランティアが参加し、また、地域の人たちがバザ

ーや食事を楽しんでいました。

私は、その施設の障がいのある一人の女性と、以前から文通をしていました。母がその場で、その女性に親しく声をかけると、その人は初対面というのにもかかわらず、笑顔で私に話しかけてくれました。それまでワープ口で書かれた手紙からは、私は彼女の話す言葉やからだの障がいの程度は、まったく想像できませんでした。彼女は車イスに乗り、言葉が不自由なため、全身を緊張させて、しほり出すように声を出しました。何を話しているのか、私にはわかりませんでした。私はあせりました。会話が成り立たないからです。彼女の言葉が聞きとれないため、顔の表情から何を言おうとしているのか、私は必死に読みとろうとしました。ところが、突然、彼女の思いが、言葉からではなく、直接、私の心に伝わってきたような気がしたのです。

彼女は、私と会えて、とてもうれしく思っているようでした。

そのとき、私も、彼女と会えたことを心からうれしく思っていました。実際に、彼女が何を言っているのか、ほとんど理解できなかったのに、言葉を交わす普通の会話より、彼女の気持ちがますます私の心に届き、私は深く感動しました。

握手をして別れましたが、そのあたたかい感触と笑顔は今でも忘れられません。その日のことは、私にとって、心と心のふれあいということを考えさせられる貴重な体験となりました。

私は、夏祭りでの体験を通して、次のように考えるようになりました。人と人は相手の存在を尊重し、思いやる心があれば、たとえ言葉が通じなくても、その気持ちは相手に届き、あたたかい関係が築けるのではないかと。言葉を越えたまっすぐな思いは、必ず相手に強く伝わると

思います。たしかに会話によって、人は互いの気持ちを早く簡単に理解することができます。しかし、言葉は心と心がふれあううえで、絶対に必要なものではないのかもしれませんが、このように考えれば、たとえばまったく言葉を理解できない外国に一人で暮らすようになって、なんとかやっていけそうな気がします。

人はさまざまなお互いながら生きていきます。この今という時に、地球上のあらゆる場所で、いろんな人とふれあいながら生きていく。そして人だけでなく、動物や植物、また季節の風、川のせせらぎからも

言葉を越えたメッセージを聞きとる心を持ちたい。そういう姿勢でこの二十一世紀を私は歩いていきたいです。

選評

母の勤務先の福祉施設で障がいのある人たちとの交流を通して、その初対面の様子を感動をもって描いています。言葉は不自由でも懸命に心と心を通じ合おうとする相手の表情から、人は「言葉を越えたまっすぐな思い」と確信したことが素直に表現されています。「言葉を越えた地球のメッセージを聞きとる姿勢」いいですね。

ポスター・小学生の部



おはし かえで さん
(亀山小学校5年)

